

イランカラッテ〜

イランカラッテ〜！私はアイヌ民族として北海道阿寒湖温泉で1960年に生まれ、育った。

山には鹿の群れ、ウサギ、^{ひくま}羆、^{たぬき}狸、^{きつね}狐、シマフクロウ等の動物たちが遊び、湖では漁師がワカサギ、^{ふな}鮎、ヒメマス（原産）漁にいそしみ、原始の時代から居た特別天然記念物のマリモが生息している豊かな天然自然に囲まれているのが阿寒湖温泉だ！

4歳の時に父に連れられて日本一周した。東京、大阪、名古屋と大都市を中心にデパートで木彫り実演販売をして歩いたのだ。アイヌで木彫り実演販売を最初に始めたのが父であったと思う。4歳のいたいけな俺は意外と早くから都会に暮らす洗礼を受けていた。また小学校3年生の時は、東京の北千住にあったデパートでの実演販売に、学校を半年間も長期休暇させられ連れていかれた。

1968年頃の東京の河川は、くさい^{ひど}酷いスモッグでいつも空が曇っていて、俺は一日中「グン、うん」と咳ばかりして食も細くなっていた。親父はそれが公害のせいだとは気がつかなくて、咳ばかりする俺に「なんだっておまえは大人みたいに咳払いばかりするんだ！飯も食わん！」と半ば俺を責めていた。なんだか俺は申し訳ないような気持ちになり咳を我慢しようとしたが出来なかった。

結局、北海道に帰って来てしばらくしたら、いつの間にか咳はおさまったが、食欲が戻るのには時間がかかった。あれがスモッグのせいだと気がついたのはずいぶん後で、公害問題をテレビで報じていた中学生くらいになってからのことだった。そういえば東京の水道の水はまずかったし、料理の時のあのカルキ臭さは今でも東京に行けば「ああ、都会さ来たなあ！」と思わせるほど記憶に刻まれたものだ。残念な経験ではあったが、俺は図らずも自然の恩恵と人間が引き起こした負の恩恵の両方を経験したことになるので、自然の豊かさや都会の悪業を語り、「人は自然の一部だ」を書くのにふさわしい存在ではないか？まっ、少々大げさな言い方ではあるが。

思い出してほしい、人の優しさ、
大地のぬくもり。人は自然の一部だ



秋辺 日出男 (あきべ ひでお) 通称デボ
ユーカラ劇脚本・演出家

人は自然の一部だ

最近思うのだが大都会に暮らす人間ほど自然の恩恵を受けているのに、それに気づいていないのは当の都会人ではないか。だって新鮮な飲み水は田舎から引いているし、水自体が自然の力によって人類にもたらされている。しかも大量に消費するのは都会だ。空気も水も田舎やへき地の山川に依存しているではないか？石油だって本をただせば自然の産物を頂いているにすぎない。人類は加工しているだけなのだ！結局、人類は自然に依存しきって命をつないでいるという、こんな単純な構造を忘れて環境すら自ら破壊して生きづらくしている。要はアホなのだ！バカなのだ！

だが田舎モンの俺でも携帯電話は持っているし、車にも乗ってアスファルトの道路を削りながら走る。長距離移動はジェット機。実は大都市の暮らしを悪く言える立場ではない。ではどうしたらよいか？質素に謙虚に楽しく貧乏暮らしを続けようと思う。

よく先住民族は自然と共生していると言われるが、^{すべて}総てにおいてではない。が、日本におけるアイヌ民族と自覚するアイヌには、かつての暮らしから伝承された生き方が色濃く共生思想として伝わっている。いまどきの暮らしの中、感覚的には現代と太古の中間的ポジションで存在していて、いつでも古いアイヌの世界観にアクセスできる生き方をしている仲間は多い。「カムイありて人あり、人ありてカムイあり」とよく言う。カムイを自然と意味づければ納得のいく考え方だ。ただし完全な対等ではないカムイに対しては「オリパク」頭を下げる、一歩引いた感覚でいるのだ。

人間と自然を分けて考えるのは、俺は反対だ！人間のおごりが自然を保護するという勘違いにつながっている。自然の一部が人だと分かれば、自分で自分を傷つけることも支配も間違いだと理解した生き方に到達できるはずだ！

あなたの心にそっと触れさせてください

俺はアイヌ民族の考え方で「人を見たら、人と思え！」という教えが好きだ。人というものは尊いもの、社会の一員で誰一人必要とされないものはいないもの

だと習った。アイヌも非アイヌも関係なく同じことだと思う。

最近のネット空間で使われる「死ね！消えてくれ！」などに代表される書き言葉の暴力は、人間の貧困さを表出させたものだ。そんな書き言葉を使うのは辞めよう。そんな言葉づかいをしなくても他人を侮辱することはできるが、「死ね！消えてくれ！」等の使用を正当化できることにはならない。もっとまじな人間同士の豊かな関係を築きたいものだ。そんなネットの悪影響が最近の実社会にも表れていると思う。顔と顔を突き合わせて話し合う感覚を取り戻すことがまず必要だと思う。

イランカラテ〜！「あなたの心にそっと触れさせてください」というアイヌ民族の挨拶の精神を忘れないでいたい。皆と共有したいものです！



プロフィール

1960年北海道阿寒湖温泉に生まれる。78年高等学校を卒業と同時に木彫り修行開始。84年民芸ショップ「デボの店」開業。同年、香港アジア芸術祭にユーカラ劇主演として出演。91年頃モシリ詩曲舞踊団にジャズマン坂田明、ヤヒロトモヒロらとボーカル兼ダンサーとして参加。93年阿寒アイヌ工芸組合専務理事就任以降ユーカラ劇、イオマンテの火祭り、ブラジル公演ほか現在まで演出多数。2008年沖縄ハードロックバンド「紫」の宮永英一ユニット「天龍」のボーカルとして参加。11年「千の風」アイヌ語バージョンお披露目がきっかけで新井満氏と出会う。13年日本ベンクラブ主催「平和の日」函館の集いにてアイヌ語「千の風」を満氏と歌い、16年「イランカラテ〜君に逢えてよかった」を共作。その他アイヌ文化講演多数。

* 民族共生象徴空間P R 合唱動画
「イランカラテ〜君に逢えてよかった」
<https://youtu.be/2xV63s58PSk>